

## 【報告】

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用共同研究課題「負債の動態に関する比較民族誌的研究(2)―人間経済における負債の多元性, 相克, 創造性」2022年度第2回研究会(通算第2回目)

日時:

開催日: 2022年9月24日(土) 13:00~18:30

場所: オンライン会議室

プログラム:

13:00~14:30 古川勇氣(新潟県立大学)「配慮と負債——北部アンデス山村のチーズ生産者を事例に」

14:30~16:00 小田英里(AA 研共同研究員、立命館大学大学院)「トランザクショナルセックストとシュガーデート:都市部ガーナにおける若者たちの交際関係を事例に」

16:10~17:40 寺内大左(AA 研共同研究員、筑波大学)「未定」

17:40~18:30 総合討論(全員)

参加者: 17名

内容:

2022年度第2回研究会を9月24日にオンラインで実施した。当初はハイブリッドで実施する予定だったが、台風の影響のため急遽予定を変更した。本研究会第2期から共同研究員として参加することになった、古川、小田、寺内の3名による報告と討論がおこなわれた。それぞれの報告者による報告概要は以下の通りである。

南米ペルー北部山岳地域に位置するカハマルカ県は国内有数の酪農地帯であり、その山村ではチーズ生産者が近隣農民から生乳を回収して、チーズを加工販売し、定期的に収入を得ている。本発表では、すでに成立している生乳販売・代金支払いという売買契約に加えて行われている、互酬や金銭的な買い付け・贈与の事例から、チーズ生産者の工夫や苦勞を紹介し、そのうえで「負債」「負い目」が感じられづらい状況を考察した。

事例は大きく分けて3つ紹介した。

1つは「チーズ生産者ならではの互酬」である。チーズ生産者はそのチーズ生産過程において産出されるバター、ホエー、生チーズなどを無償で近隣農民に提供するどころか、さらにホエーの場合、10キロ弱のタンクを5、6個運んで農民に配るという労力をかけている。チーズ生産者の提供するものは「とるに足りない」ものである

が、その労力や気遣いに農民は感謝することになる。

2つ目は「金銭的な前貸しや多くの要求」である。生乳提供をする農民のうち、老人の一人暮らしなどは生乳代金の前借を求める場合があり、チーズ生産者はこちらからの提供というかたちで金銭を貸している。また、農民の事情に応じては、帳簿に記入された金額以上を要求してくる場合があり、その場合では、チーズ生産者は気前よく金銭を提供している。そのように農民の無理難題にこたえることで、契約関係の維持・強化を図っている。

最後は「開発グループおけるまじめさからの誤解」である。国内 NGO によって二重底鍋を普及させることで、低温殺菌チーズを販売しようとする開発が進められた。二重底鍋提供のために、NGO からチーズ生産者に製造所の改築とペイントが課せられたが、その途中で離脱するものがいた。周りの人びとは、彼女たちはまじめでなかったというが、事実は誤解であった。改築のためのセメント袋をいくつ購入するなどの数値で評価される「まじめさ」によって、そのような誤解が生じたと考えられる。

最後に、金銭などで数値化されない互酬などでは、チーズ生産者に提供されるサービスや労力に農民が感謝することで、契約関係の背景にある社会的紐帯が維持されている。一方、金銭などで数値される状況では、負債によって目に見える劣位に置かれるかもしれないという不安への反発として、農民の「強気」「まじめ」な態度が顕著にみられることを考察した。

(文責 古川)

サハラ以南アフリカ諸国における、「シュガーダディ」や「シュガーマミー」との交際関係についての研究は、リプロダクティブ・ヘルス/ライツの問題解決を目的とした保健医療の分野を中心に、さまざまな学問領域で展開されている。先行研究は、このような関係をアフリカに広く見られる慣行として「トランザクショナルセックス (TS)」と呼び、その特徴を議論してきた。先行研究の大半は、主に定量的な調査あるいはグループディスカッションから、これらの交際関係が蔓延する背景や、パトロンと交際する若者たちの動機を明らかにしたものである。近年、「シュガーダディ」や「シュガーマミー」との交際関係は増加傾向にあり、世界的にも「シュガーデート (Sugar Dating)」と呼ばれて社会問題化している。本発表では、都市部ガーナの交際事例から、若者たちが複数の社会関係のなかで「シュガーダディ」や「シュガーマミー」との関係を築いていることを指摘し、彼らの贈与実践が異性間のより複雑な構造の中で起きていることを明らかにした。また、都市部ガーナにおける若者たちの交際事例をもとに、「トランザクショナルセックス」研究とグレーバーの「負債論」の接続について検討した。先行研究は「商業の経済」の論理を前提に、身体 (セックス) と金品の交換を互酬性もしくは「等価交換」のように議論しているが、本発表の交際事例は、人間経済と商業経済のあいだを揺れ

動くような関係を表している。グレーバーの「負債論」を参照すると、「シュガーダディ」や「シュガーマミー」との関係はパトロン―クライアント関係であり、ヒエラルキーな関係が成立している。事例が示す興味深い点は、こうしたヒエラルキーな二者の関係から発生する負債が、別の第三者への支援に転用されていくことにある。本発表が提示したガーナの都市社会では、相手の必要とすることを叶える能力がある者からそうではない者へと負債が循環しており、二者間の互酬的な交換とは違う形で負債が考えられているのではないかと結論付けた。

(文責 小田)

発表者はインドネシア・東カリマンタン州の焼畑社会で調査を行ってきた。調査地では企業の土地開発（アブラヤシ農園開発と石炭開発）を契機に焼畑作業時に「労働と貨幣の市場交換」である雇用労働が採用されるようになったり、道路が開通し、獣肉の消費方法に自家消費と贈与に加え、販売という方法が追加されるようになったりしている。企業の開発の中で焼畑社会の市場経済化・貨幣経済化が進行しているのである。

既存研究は農村社会の市場経済化・貨幣経済化を「市場交換ではその場限りの交換になり、恩や義理といった負い目は払拭され、人格的な社会関係は生じない」「貨幣は数量化を可能にし、人と人の関係を社会的文脈から切り離していく」「相互扶助が衰退していく」「人間関係が希薄化していく」とネガティブに捉え、語ってきた。しかし、本発表では焼畑社会に浸透してきた市場交換と在来の交換様式の「もつれ合い」（箕曲 2019）の様相に注目することで、市場経済化・貨幣経済化の中で人々がよりよい経済状況や社会関係を求めてヒト・モノ・カネの交換を試行錯誤・再編している多様な側面を明らかにすることを目的にした。

発表内容は、①雇用労働と在来の焼畑労働形態のもつれ合いを主題にしながらも、補足的に②獣肉の贈与と売買（市場交換）のもつれ合いについて、③石炭企業の補償金が贈与されている実態に基づき、貨幣の社会的位相の多様性について、④市場交換が貫徹しているはずの店で頻繁に「つけ」が行われている実態に基づき、売買（市場交換）と贈与のもつれ合いについても発表した。

主題である雇用労働と在来の焼畑労働形態のもつれ合いの様相を要約すると次のようになる。まず、等価労働交換（労働の贈与交換）や無償労働（労働の贈与）が雇用労働（市場交換）に「置換」されるといった既存研究が指摘してきたネガティブな側面（もつれ合い）が確認された。一方、雇用労働の依頼を断り無償労働する「逆置換」の実態、等価労働交換・無償労働と雇用労働を「併用」する実態、雇用労働を採用し大規模焼畑が造成されることで、弱者救済機能を有す収穫分収労働が「誘発」されている実態、在来の労働形態で対処できない状況を雇用労働が「補完」している実態、労賃を標準価格から融通するという労働あるいは現金の贈与の

要素が「混成」した雇用労働の実践、収穫分収労働の分収量の融通が雇用労働の労賃の融通の実践に「継承」されている実態など、多様なもつれ合いの様相が明らかになった。既存研究が指摘してきたように雇用労働を個人利益の追求の手段として位置づけ、非人格的に実践する側面がある一方で、雇用労働を社会的文脈の中に位置づけ、多様な経済効果を引き出しながら、また、個人の利益追求と社会関係維持のバランスをとりながら実践している側面も明らかになったのであった。

(文責 寺内)

最後に、次回研究会は3月に開催することとし、河野、酒向、中山の3名が報告を行うことを決定した。

(文責 佐久間)